

# 宇宙の文字体系 Cosmos Character System

黒月樹人(Kinohito KULOTSUKI [ @ ] KAI, [treeman9621@ray.ocn.ne.jp](mailto:treeman9621@ray.ocn.ne.jp))

## 1. 比較するサンプル

タイトルは大きいですが、比較するサンプルはわずかである。一つ目はウンモ星の文字。二つ目は金星文字。三つ目は、多くのパターンを含む、地球の文字。地球は、生物に関する、この近辺の宇宙における、リアルタイムで、実験的な、星全体にわたる博物館ではないだろうかと思えるほど、生命体の遺伝子情報にみちあふれている。文字についても、同じようなことが言えるかもしれない。ウンモ星の文字と金星文字といえども、地球の文字の分類体系から、それほど、はみ出てはいない。

ところで、ここまで読んできて、数々の先入観に基づき、これらの他の星における文字について、そんなものは「偽物」だと考えている人に述べておこう。実は、私も、かつては、それらの文字が偽物だという風評を信じて、アダムスキーの本や、ウンモ星人からの手紙について精力的に本として出版してきた、ジャン・ピエール・プチの本を、引越しの時に捨ててしまったり、どこかの見えない場所に押し込んだりしてきたのである。

しかし、この二年あまりの調査と研究により、画像解析の技術を身につけ、UFOの画像の真偽を判定するシステムを開発し、ふと思立って、ウンモ星の、あの有名な、底面に、漢字の「王」、もしくはキリル文字の「Ж」が描かれている UFO の画像を調べてみたところ、ウェブの有名な UFO サイトが認定して載せている UFO 画像の 7~8 割が合成画像であるにもかかわらず、そこで無視されていたウンモ星の UFO 画像が、現在の地球の技術では不可能な、まぎれもない本物であったということが明らかになったのである[1]。そもそも、私以前にダークマターを「見せられる」ようになった者はいないようだし、そのダークマターの画像を変形して、ウンモ星の UFO を包み込もうとさせるのは、まあ、無理な話だ。つまり、私が画像解析の技術を(世界でもトップクラスのレベルまで)進歩させたら、その進歩以上の画像が現れたのである。このようなことは、地球において、これまでの技術で達成可能なものではないと判断することになる。科学的な技術によって解析を進めてゆくにつれて「ほんもの」だと考えざるを得ないということになってきているわけだ。

もうひとつの文字体系である金星文字については、40 年以上も前から、アダムスキーの著書の中で紹介されてきたものである[2]。最近では、「金星人オムネク・オネク」の著書が出て、その中で、金星人からの手紙が、画像として紹介されている[3]。かつて、この画像による手紙は、TV の番組の中で取り上げられ、議論されたこともあるが、強い証拠にはならなかったし、これをサポートする情報も提出されなかったので、笑い話のネタのように取り扱われた。私が、この文字を「ほんもの」だと考えるのは、かつて、アダムスキーが主張していたことの証拠が、NASA の画像を調べることによって、次々と現れてきたからである。金星そのものについては、まだ分からないことが多いが、土星や木星の衛星に、生命体が存在していて、高度な文明を生み出しているということの証拠画像を解析した[4]。

さらに、太陽に最も近い惑星である水星にも、田園都市と呼べるようなものが存在するということが、やはり、NASA の画像からのデジタルモザイク画像に、銀塩写真のように再現する技術を適用することによって、明らかになった[5]。間違っていたのは、地球の(偏った、一部の)科学のほうであり、その科学技術の(正当な流れによる)成果によって、そのことが証明されたのである。しかし、このようなことを、非常に自尊心が肥大した、この星の科学者たちが、そう簡単に認めるはずがない。それらを正式な論文にして提出しても、読むどころか、見もしない。

## 2. 思考のための新しいシステムの言語

ウンモ星の文字や金星の文字に関しては、これまでになく強力な証拠が現れてきたので、それらの証拠を生み出した私としては、「ほんものです」と主張することになる。私が述べることを聞かずに過ごしてゆける人々が多い。地位や名誉や、生活の安定度、さらには、老後の年金のことまで、私とは比べようもなく恵まれている。しかし、「ほんとうのこと」からは遠ざかり、自らの科学者としての能力を、多くの放射能や有害電磁波を防ぐため、鉛のヨロイの中に押し込めてしまっているということに、気づかないまま生きてゆくことになるだろう。

物語が大きくなりすぎた。私より恵まれている人々のことを心配する余裕なぞ無かったはずだ。私は、私が知り得たことによって生まれた視点を紹介するだけだ。私のホームページをチェックした、ある人が、あまりの短期間に、数多くの論文調のページを構成していることに驚いた。また、私が「単なるエッセイ」だと思っているくらいのページを読んで、「難しくて分かりませんよ」と言っている人もいる。かなりの高学歴で、社会的にも成功していて、高収入の人である。この人でも、これくらいなのかとってしまった。

いったい私は、何シグマ分だけ、母集団から離れてしまったのだろう。でも、はじめから、このような状態だったわけではない。時々ジョークのネタとして使うのだが、「小さい頃や若いころは」と語り始め、「普通の」と言って、相手が、その次の言葉を予想して、「人」だとか「知能」だとかを思い浮かべたと見るや、「天才でした」と締めくくる。しかし、自分より知能の高い若者や子供たちを何人も知っているし、教えてもきた。子供のための知能テストをやってみると、とてもかなわない。でも、大人には大人の知能の測り方があって、そのときは、時間の制限が非常に緩い。何週間とか何ヶ月とか、場合によっては一生をかけてもよい。要は、その間に、どれだけ難しい問題にチャレンジして、それを解くかである。数(かず)は問われない。難しいものなら一つで十分だ。この手のテストなら、私は何度もクリアしてきた。

その一つの問題が「思考のための新しいシステムの言語」を開発するというものだった。この問題に目覚めたのは、私が 30 歳代のころである[6]。そのころには、私にとって難しいことが山ほどあった。評論家なら、すらすらと語ってゆくような、SF 小説の幾つかに、私は、何もコメントできないという意味で、お手上げ状態だった。会議の進行状況を要約して、指を折りながら、「現在取り扱われている問題を 5 つの要素に分けることができます」

と言っている議長の頭の良さに、かなわないなと思っていた。それから 10 年ほどたって、私が別の頂(いただき)に立って、周囲を眺め、議論を要約し、論文の内容を批判していることに気がついた。その間に何があったのか。単なる経験以上の、転職と研究の中で、私は、私自身の思考力を単に鍛えるのではなく、私の限られた思考力を、より効果的に使うための「道具」を作り上げるべきだと考えたのだった。その「道具」というのが、「思考のための新しいシステムの言語」だ。このときのことは、いくつかのエッセイにまとめてある[7]。ここでは、それらの内容を繰り返さないことにしよう。

この問題を解くために、私は「宇宙人の文字体系」を探した。私たちより高度な文明に達したものは、それなりの言語体系と、それを支える文字体系をもっていることだろう。このように考えたのだったが、宇宙旅行ができるわけもないので、このような研究は、たちまち行き詰まった。SF の映画を見ていると、宇宙人の多くは英語で話していることが多い。地球人の言語を、宇宙人のほうから学習して使ってくれているという設定だ。ところが、文字については、時々、見たこともないようなものが画面に現れる。しかし、これらのすべては、地球人であるスタッフの誰かが考えたものだ。地球の言語体系の発想を超えるようなものは何もなかった。

地球は文字体系の博物館でもある。これらを調べた先駆者は数多くいて、「世界の文字」[8]、「文字の世界史」[9]、「文字の歴史」[10]、「文字の起源と歴史」[11]といった、大きなスケールのタイトルの本が出版されている。これらの百科事典としての情報を眺めて、私は、いくつかのことに気づいた。そして、あるとき、新しい文字体系を生み出そうと、より直観的な記号の幾つかをデザインしていたとき、これまでの地球の文字の迷路の中で、同じようなことをやっていることに気がついた。もうひとつ別の、ほとんど同じレベルの文字体系を生み出したとしても、これは、ただの「遊び」にしかすぎない。このような「遊び」は、現在、携帯の文字記号で、謎解き記号を作るという現象にあらわれている。

私のねらいは「思考のための新しいシステムの言語」であった。ここから、「まわれ右」をして、まったく違う分野の記号体系をしらべてゆくことになる。最も参考になったのは、コンピュータ言語と、電気配線図だった。反面教師のような意味で、コンピュータの分野で使われるフローチャートも役立った。私は、科学技術の分野で働くようになり、コンピュータでプログラムを組んで、観測データを分析することを日常の業務とするようになっていた。そのとき、フローチャートをいちいち描こうとするのは、ほとんどプログラムを組む仕事からはなれてしまっているが、情報処理の免許だけは持っているという、上司ぐらいのものだった。私も、その中の一人だったが、現場プログラマーたちは、誰ひとりとして、フローチャートなど描くことなく、どんどん、新しいプログラムを作っていた。コンピュータ言語が発展したことと、プログラマーたちの思考回路のためのメモリー領域が拡大したので、いちいち紙面にフローチャートを描かなくても、ディスプレイの中のプログラムを見れば、何をやろうとしているかは分かるという状態だった。ところが、仕事の中でも、何人かの人と行う会議や、営業のための説明などでは、プログラマーどうしの、高次のコミュニケーションは通用せず、あいかわらず、ぼんやりしたイメージの思考の雲

が、風になびかれて、ふわふわ漂い、あれよあれよと消えてゆくのがあった。これらの、まぬけなエピソードは尽きない。TVで行われている深夜番組や日曜特集での議論の空しさ。そこでは、全体的な議論の様子など、どこにも描かれなくて、単発の意見だけが、機銃掃射のように、バババと打ち出される。しかも、そのほとんどが空砲で、相手の意図を変化させるようなものではない。TVって、こんなもの。そう思っただけならいい。TVから離れた、現実の会議などでの議論でも、同じようなものなのだ。

### 3. エドワード・デ・ボーン「思考のための新しいシステム」

この問題について、「思考のための新しいシステムの言語」ではなく、「思考のための新しいシステム」という視点で取り組んでいる研究者がいる。エドワード・デ・ボーン [12]だ。私が「思考」について、ばくぜんと考え始め出していたのは、大学に受かる前の、まだ、予備校にもかよっていなかった頃の頃であったが、そのときすでに、デ・ボーンは「水平思考の世界」だったか、「水平思考」の著書を何冊か出版していた [13]。これはインパクトがあった。地球人の思考のパターンを研究し、分類して、それらに、適度な名称をつけ、「思考のシステム」について論じていた。そのころデ・ボーンが生み出したのは、po という接続詞もしくは疑問符であったが、これは定着しなかったようだ。デ・ボーンは研究のシンボルとして、「記号」ではなく「言葉」を生み出そうとしていたようだ。それから30年ほど経過した。デ・ボーンの研究は、「会議のための6つの帽子」 [14]へと進んでいる。この考えはシンプルだが、とても実用的だ。この考えを抽象的に要約すれば、「視点の変化を意識する」ということになる。問題に関する「好意的な考え」や「楽観的な考え」を「黄色の帽子」というシンボルで意識する。また、「否定的な考え」や「非観的な考え」は「黒色の帽子」だ。中でも、少し異なっているのが「青色の帽子」で、これは、他の帽子による思考のまとまりを、地面の地形にたとえ、空に浮かんだ鳥が、地表の様子を見るようにして考えるということの意味している。要するに、コンピュータ言語のCで用いられている、「main( )関数」の考え方だ。これを見失ったら、会議は泥沼へと入りこみ、時として、底へと沈んでしまう。コンピュータプログラマーたちが、複雑で巨大なプログラムを、フローチャートも描かずに組み上げてしまうときの、コツのようなものを、見事に、シンプルな概念で説明しているのだ。

### 4. 思考言語における、新しい方針と制約

デ・ボーンの「思考のための新しいシステム」という視点によって達成されたことは素晴らしいが、それにはその限界というものがある。そのシステムでは、まだ、「思考そのもの」を描いてはいないということである。

20年ほど過去のことになるが、私は、複雑な思考が表現されているように見える、哲学論文のようなものを、日本語で、地図のように書き表そうとしたことがある。すると、A4の紙面では足りなくなっていて、それらを糊で継ぎ足し、どんどん広げて、とうとう、畳の大きさぐらいになってしまったことがある。そこで私が考えたのは、できるだけ小さな記号

の中に、できるだけ大きな情報を含めてしまおうということだった。

これまでの言語体系でも、いろいろな工夫をして、それぞれの言語が行っているのは、新しい言葉を定義するというものだった。アルファベット文化圏では、頭文字をとって、新しい単語を生むこともある。漢字文化圏では、まさに、新しい漢字を生み出すというものだった。日本語で作られた「峠」という漢字のようなものである。

このとき、私は、アスタリスク記号を、新語の定義のためのシンボルとして用いるというルールを組み込んだ。「場所」や「時」などの、情報を伝達するときや、考慮するときの、重要な要素の数々について、一文字で表すシンボルを決めた。このときの場所のシンボルについては、やがて、世間で流行している「@」へ変えることになった。「時」のシンボルは「☆」にしている。歴史的にも、星は時刻を決める時の基準になってきた。昼間の「星」は「太陽」を意味する。

しかし、このようなアイディアは、やがて行き詰まることになる。あまりに記号を増やしてしまうと、暗号化してしまうし、ただ、これまでの地球における言語記号の種族を、ひとつ増やしただけになってしまうからだ。

そこで、私は、新たに定義する記号の数をできるだけ少なくするという方針をたて、さらに、現代用いられている文章が、「手書き」から、「コンピュータによるワープロ」へと変化してきたので、キーボードから選び出せる記号に限定するという制約を受け入れることにした。

## 5. ウンモ星の文字体系

キーボードでも記録できるようにしたのであるが、簡便さと自由さと速さのことを考えると、手書きのほうが、はるかに優れている。ウンモ星の文字や金星の文字についても、資料画像として得られているものは、すべて、手書きのものと考えられる。ウンモ星から地球に UFO でやってきているくらいの文明だったら、ワープロのようなものを開発していてもおかしくないとも考えられるが、この点は、何らかの考え方の違いによるのかもしれない。ウンモ星人からの手紙が地球人に送られはじめたころには、地球の側の文明では、まだワープロというものが普及していなかっただろう。そこへ、機械作りの文字で手紙を書くより、文明のレベルを尊重して、手書きのスタイルを採用したのかもしれない。おや、下の図を見ると、タイプライターの文字と、手書きの文字が混じっている。なるほど、地球のタイプライターは使ったのか。

ウンモ星の文字は、簡略化が進んでいて、アルファベットのレベルに近いものである[15]。単語における文字の構成は、恣意的なものであろうが、数字については、図 1 より、「12 進法」であることと「(不完全であるが)位取り」の方法を採用していることが読み取れる。0 から 11 までの数に対して、記号が一つずつ対応していて、12 は、次の位に上がっているので、1 と 0 で  $\text{—} \rightarrow$  と並べるべきだが、これを合成して  $\text{—} \curvearrowright$  となるらしい。次の 13 も、1 と 1 で  $\text{—} \text{—}$  となるべきところ、上下に重なって  $\text{—} \text{—}$  となっている。ここの二つが例外であるが、14 は 1 と 2 で  $\text{—} \text{—}$  となり、ここから完全な位取りが始まる。ここの数字記号の対

応で、一か所ミスがある。画像では 99 =  $\odot\Gamma$  としてあるが、96 で 8 と 0 の記号を並べて、そこから 99 は、あと 3 つだから、正しくは 99 =  $\odot\Pi$  となる。120 の記号でも、位取りの原則から外れている。このあたりの事情が、いかにも、ウンモ星の歴史事情という様子が現れている。もし、これらの記号を地球人が組み上げるとしたら、12 と 13 と 120 のように、不合理な記号を作らないだろう。

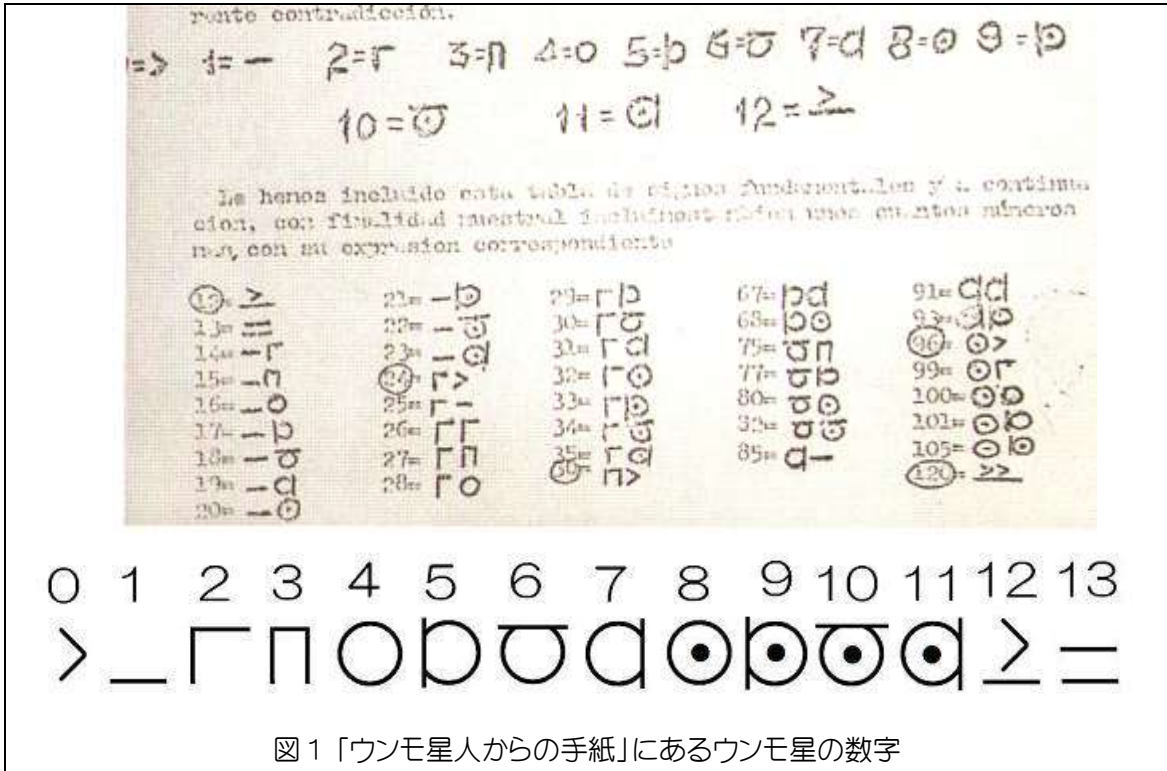


図 2 には「ウンモ星人からの手紙」にある署名と印が示されているが、このときの署名の中に、上記の数字がまぎれ込んでいる。3( $\Pi$ )と 6( $\circ$ )である。この署名は、右から書かれたのか、それとも、左から書かれたのか。書いた腕は、ダッシュの描き方から、左腕のように思える。左から 3 つ目の文字で、下にある線を左に向ってはねているので、右から左に書いているように思えるのだが、本文では、地球の習慣にあわせて、左から右へと書

いているようだ。図 2 で、ウンモ星 UFO の底面にある文字を彫りこんだ印が押してあるのには驚く。地球の習慣を真似ているのか、それとも、本来から、そのような習慣をもっているのか。なかなか興味深い。印を押す習慣は、地球で最初に文字を記録したシュメールの文字文化にもあったらしい。インダス文明だったかな。

## 6. 金星の文字体系

金星の文字に関しては、ほとんど、図面と、その文字というスタイルから始まっている[16]。図 3 のようなものが、何枚か残されている[17]。これだけの情報から、地球人の一人が反重力モーターを開発したという[18]。レモン型の図が、その反重力モーターの模式図らしいが、周囲にある文字記号には、いったい、どのような情報が潜んでいるのだろうか。そして、これらの文字は解読されたのだろうか。その記録は残っていない。反重力モーターを開発した人の消息は知られていない。これらの文字記号によく似たものは、地球では、ペルシア語の文字や日本語のひらがなにある。「ひ」と「へ」と「く」があるだけでなく、「ふ」のデザインに近いものもある(左上)。アルファベットの「s」「w」「x」「y」もあるし、数字の「6」と「2」のようなものもある。似ているからといっても、そのまま同じ意味ではないだろう。また、このように並んでいると、どのように読んでゆけばよいのか、少し考え込んでしまう。



図 3 金星人からの図と文字

最近現れた金星文字のテキスト[19]は、まるで、論文か公文書のように、文字を配置するスタイルが決まっているようなもので、本文は、整然と並んだ、漢字による中国語のような、全角一文字ずつの文字が並んだものとなっている。同じ形の文字を探すのが難しいほど、多様なパターンである。これらの文字は、地球の言葉に翻訳されている。ただし、各文字の意味や文法についてのコメントはない。ちなみに、図 4 の内容は、「オディンより—長い歴史をもつ金星人を代表して」(上の行)と「パロマー山の私たちの友人へ」(下の行)となっている。どの記号が、これらの、どの意味に相当するのか、見当がつかない。

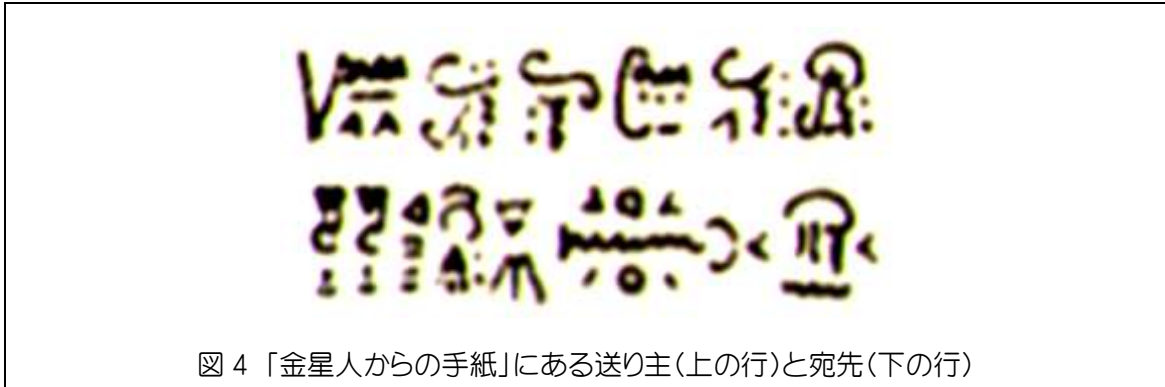


図 4 「金星人からの手紙」にある送り主(上の行)と宛先(下の行)

図 5 も、同じ手紙の本文からは離れて、右上に書かれているものである。これにも訳があって、「私、オディンは、あなたがたがまだそのごく一部しか知り得ていないこの広大な太陽系の 12 の惑星を代表しています」となる。すると、図 4 の上の行と、図 5 の中には、「オディン」という、共通の固有名詞があることになる。全く同じ記号での配列はないが、似たものはある。同じ「オディン」でも、意味の格によって、表現が変化するのかもしれない。そのようなことは、歴史の長い言語では、よくあることである。



図 5 「金星人からの手紙」にある宣誓文

この図 5 で注目しておくべきことは、「太陽系の 12 の惑星」という部分である。これの記号は分かりやすい。図 5 の 3 行目に、向かって左から「太陽」「水星」「金星(下に矢印がある)」「地球」「火星」「木星」「土星」「天王星」「海王星」が並んでいるが、そのあとには、冥王星がくるのではなく、オールトの雲らしきものが描かれている。それを過ぎて、4 つの惑星があると描かれている。最後のものは、不思議な角(つの)をもっているようにも見える。軌道を表わしているのだろうか。オールトの雲の向こうとしたら、地球からの観測は難しいかもしれない。この手紙は TV で紹介されたが、番組の方針なのか、笑い話のネタになってしまっていた。愚かだとしか言いようがない。科学者としての名声をもつ人間が、この



ような情報を笑い飛ばしている。なんという、おごった態度なのだろうか。これだけの記号体系を独自に生み出すことが、どれだけ難しいことであるかとか、太陽系のオールトの雲の向こうに、まだ惑星が4つもあるという情報を、探索のためのヒントにするということなどを考えるのが、謙虚な態度の科学者がとるべきものであり、そのような謙虚さがあれば、いずれ、偉大な発見へと近づくことができることだろう。

本文の最初の行を図6に示す。これの訳は、「私たちの兄弟姉妹である地球の人々、そして同胞惑星と地球を結ぶコンタクティを代表する親愛なるあなたへ」である。この金星文字の、向かって左端の一文字は、図4の上の行の、左端の一文字と、よく似ている。ただし、図4での、右下の▲の一つが、図6では：に置き換わっている。訳文の意味を比較すると、「(誰それ)へ」という部分を表わしているように思える。英語での「To」の役目ではないかという推理である。これらの文字や文法について本格的に知りたければ、アメリカ人として暮らしている、本来は金星人であるという、オムネク・オネクに聞けばよい[20]。



図6 「金星人からの手紙」の本文書き出し

ところで私には、もうひとつ閃いたことがある。それは、これらの金星文字が、マヤ文字を書き崩したものではないかというアイデアである。発想は「漢字」にも似ているが、デザインは、マヤ文字のほうに似ている。石に掘られたマヤ文字は、それなりの専門家が、様式美を守って、時間をかけて制作したのだろうが、これらを紙のようなものに記録するとしたら、もっと簡略化された記号のほうが便利である。エジプトのヒエログリフにも、神官文字と民衆文字の違いがあったし、日本語でも、漢字と仮名を併用している。歴史的には、マヤ文明より、金星の文明のほうが、はるかに永いようであるから、マヤ文字が変化して金星文字になったという物語は却下されそうだが、この逆の物語は、一部を變形して、否定できない可能性を持っていることだろう。

この金星文字は、小さな領域に、非常に多くの情報を詰め込んでいるという可能性がある。ある図書館に、「人類(だったか、歴史上で、だったか)最高の発明」と、まくらことばがあって、「アルファベット」というタイトルになっている本があった。これは、地球人の視野の狭さが顕著に表れているものであり、自らの能力の低さを、このような形で誇るという、ある種のジョークのように見える。笑える。確かにアルファベットは便利である。覚えやすいし、音声の言葉を表わしやすい。しかし、漢字にも利点はあるし、人間の能力は、漢字を覚えるだけの潜在力を持っているのだ。これらのことは、英語文化圏にも漢字文化圏にも属している日本語文化圏にいるものなら、容易に判断できることである。マヤ文字が比較的最近に解読されたとき、アルファベットのほうにではなく、漢字に似たものであるということ、アルファベット圏の科学者が驚いたそうだが[21]、これも、ジョーク

の一種であろう。ウンモ星の文字はアルファベットに近いものようだが、金星の手紙用文字のほうは、おそらく、漢字に近いものであろう。

## 7. 思考言語コアの文字体系

それでは、私が開発した「思考のための新しいシステムの言語」は、いったい、どのようなものであるのだろうか。実は、上記の2種類のタイプの、利点をうまく組み合わせ、できるだけ狭い領域に、できるだけ多くの情報量を詰め込み、かつ、そこに込められた意味を、直観的に掌握しやすくしようという方針でデザインしたものである。このようなタイプの言語は、他に、あまり類例が見当たらない。ひょっとすると、宇宙の文字体系において、新しいレベルの一つになっているかもしれない。そのような位置づけなど、どうでもよいことだ。大切なのは、このような言語が、どのような利点をもっていて、どのような利用価値があるかということにある。利用価値は非常にある。そのことを知っているのは、私だけかもしれないが、これを開発して、使っていなければ、ここまで達してはいなかっただろう。はっきりと言おう。知能が飛躍的に高まる。もちろん、数学と同じで、謙虚に学び、トレーニングしなければならない。なにごとにも王道はない。しかし、「効果的な」という意味で、ある程度の「近道」はあるのだ。近道というよりは、山頂を目指す、まっすぐにのびた、階段の道に例えられるかもしれない。そこを登れば、つらさは減らないが、確実に登ってゆける。それ以外の道は、どこへとつながるか、のぼるか下るか分からない、獣道か踏み分け道のようなものだと考えればよいだろう。

図7は「思考のための新しいシステムの言語」すなわち「思考言語コア」における適用例である[22]。「ハトホルの書」[23]という本の第13章「いまだ問われざる問い」の要点を表現したもの。p292にあったものを、通常日本語に戻すと、次のようになる。

「いまだ問われざる問い」というのは、あなたが、この状況に関して、少しでもよい結果をもたらすために、何ができるかということであり、このように問うとき、あなたの意識が進化します。

実際の本文を引用すると、次のようになる。

「この状況で少しでもよい結果をもたらすために、私にできることは何か」という、いまだ問われざる問いに転じることであなたの意識は進化します。

この、実際の本文は翻訳文の性質が現れて、少し分かりにくいものになっている。

図7の(p292)の後にある表現は、これらの文章の内容を、意味構造に基づいて分析し、思考言語コアの記号を用いて表現したものである[24]。\*1「」は、「」の内容を\*1と定義するという意味で、<>は文章における等号である。数学におけるxの内容を定義するようなことを、文章において行うシステムである。ここまでの表現で、既に、▽を「あなた」と定義してある。実は、ヒトのシンボルとして、この▽の上に、小さな○を乗せた記号を、手書き文字として設定していたので、そこからの連想で、▽を「あなた」としたのである。◇は抽象的なことがらを意味し、◇?で疑問の意味をもち、「何(what)」となる。また、これらの間にある「——できる>」の表現は、向きをもった関係詞であり、簡単に言うと、

動詞である。「—」の部分尻尾と呼び「>」の部分くちばしと呼ぶ。／は状況の表現のためのシンボル記号である。[→]の[ ]は、文と文を接続する関係詞であり、矢印を入れた[→]は、「ならば」を意味する。「意識(▽)」の表現は、数学における「f(x)」を意識したものであり、▽で表現した「あなた」を変数とした、「意識」という関数を表わしていることになる。こうして、変数部分を変えれば、「意識(私)」や「意識(全体)」などの表現を用いることができる。このようなスタイルを導入することにより、中心的な表現が「意識」のほうにあり、( )の中にある表現は、添え字のような、補助内容であると識別することができる。「—進化>」は、「進化する」という意味である。最後の「;」は文末記号である。C言語のプログラム言語におけるものから転用した。しかし、最近、英文において、この文末記号を用いたところ、あまり目立たなくて、文の切れ目が分からなくなるので、あらたに、「[]」を文末記号することにした。この記号は、「[ ]」の内部を取り除いたものである。

◎/第13章 いまだ問われざる問い

(p292) \*1 「いまだ問われざる問い」 <> ,

「▽—できる>◇?, on/この状況, for/少しでもよい結果」;

[→] 意識 (▽) —進化>;

(p293) ▽—使う> 生命 (▽), for/▽—貢献> 生命 (▽▼,...);

<●> ▽—使う> 生命 (▽), for/▽—貢献> 生命 (▽);

(p294) ▽—生きる>, for/▽—貢献> 生命 (▽▼,...);

[→] 波動 (▽) —変える> あらゆるものごと;

[→] ▽—>> 道 (さまざまな機会) —開<>;

[→] 運命 (▽) —変わる>;

(p295) ▽—握っている>, \*m「鍵」—解き放つ> ▽,

—導<> ▽ >@悟り,

—>> ▽ > @/高く;

気づきのパワー (▽), 選択する力 (▽), 共鳴振動の法則,

—与える> \*m > ▽;

(p296) 最高の意識状態 ({▽}) <> 振動エネルギー場 (愛<呼ぶ— {▽});

(p299) 愛 <> 波動 (最高次) &本源的オクターブ,

<> 基音—共鳴> @全宇宙&@全次元;

(p308) 出会いのすべて <> チャンス (▽—貢献> 生命);

(p309) ▽—見出す> 内なる価値 > (▽—出会う>) 存在のそれぞれ;

[→] ▽—貢献> 生命;

図7 思考言語コアの文章

実は、次の図8は、英語において思考言語コアで用いられる記号を表としてまとめたも

のである[25]。黒月樹人のホームページの中で、かなり上位に位置している。英語文化圏の人々に親しまれているようだ。気づいてみると、この表の日本語版を制作していない。

THE SYMBOLS OF CORE IN ENGLISH		
By KINOHITO KULOTSUKI, treeman9621.com		
SIMBOL	NAME	EXAMPLE TO USE
--	tail	The bird fly.
>	beak	The bird --fly>.
□	block, end mark	The bird fly □
<>	mouth, both beaks	The dog <is> a sort of an animal □ The dog <> a sort of an animal □
()	egg, round brackets	The dog <> a sort (an animal) □
[]	box, square brackets	[and] the cat <> a sort(an animal) □
//	para, parallel lines	The bird --fly> /in/ the sky /with/ the wings □
@	atm, place code	The bird --fly> @ the sky /with/ the wings □
☆	star, time code	The dog --eat> a bone ☆noon □
-->>	maker	A jockey makes the horse run. A jockey -->> the horse --run> □
--->•>•	double targets	A mother takes a doll to a daughter. A mother --take> a doll > a daughter □
\$	dollar	To do. Doing. \$---do> □

図 8 THE SYMBOLS OF CORE IN ENGLISH (英語におけるコア記号)

この表の例文にあるように、思考言語コアは、日本語よりも英語の語順のほうに、よく適用している。「主語」と「目的語」の関係を後から説明するより、これらに関係語として、ここでは動詞などの関係語を入れて、「主語」——進化>「目的語」とか、「主語」<>「目的語」と表したほうが、全体の意味構造をつかみやすいのである。こうして、刑事ドラマでよく登場する、事件における犯人や被害者などに関する関係図のようなものを、思考言語コアの表現として、容易に表すことができる。コンピュータの世界で古くから用いられてきているフローチャートのようなものも、このスタイルで表すことができる。

このように、思考言語コアの記号と文法は、ごくごくわずかなものに制限してあり、比較的容易に習得することができる。それでいて、思考言語コアの表現に置き換えられたものは、一般の文章を、まるで、数学での表現に置き換えたような効果を持ち、数学の証明文のようなものに似た、論理的な表現スタイルを組み込むこともできる。特定の分野で、優れた効果をもっているコンピュータ言語によく似たものも生み出すことができる。おそらく、このような言語は、少なくとも、この青い惑星において、まったく新しいニッチへ

と適用した言語であろう。ひょっとすると、金星文字やウンモ星の文字では、このような表現の形跡が見られないことから、太陽系や、その近隣の文化圏において、初めて到達した、新しい道具の一つなのかもしれない。そうだとしたら、こんなに痛快なことはないだろう。(2009.04.21 Written by Kinohito KULOTSUKI [ @ ] KULOTSUKI ANALYSIS INSTITUTION, [treeman9621@ray.ocn.ne.jp](mailto:treeman9621@ray.ocn.ne.jp))

参照資料 ([<<] は由来を意味する接続詞)

[1] ウンモ星の UFO 画像 [<<] CPP51「UFO 画像解析ファイル ウンモ星の UFO」

[http://www.treeman9621.com/ CPP51\\_UFO\\_Image\\_Analysis\\_Files\\_on\\_Unmo\\_UFO.html](http://www.treeman9621.com/ CPP51_UFO_Image_Analysis_Files_on_Unmo_UFO.html)

[2] 金星文字 [<<] 本文の図は「オメ教授が発見した金星文字!？」

<http://www.gasite.org/library/ucon122/index.html>

他の金星文字の図は、次の URL にある <http://kiti.main.jp/mizushima/vol01.htm>

<http://www.gasite.org/library/ucon122/index02.html>

[3] 「金星人オムネク・オネク」の著書 [<<] 「私はアセンションした惑星から来た／金星人オムネク・オネクのメッセージ」, オムネク・オネク[著], 益子祐司[訳], 徳間書店[刊], 2008\_03\_31

[4] 土星や木星の衛星に生命体が存在していて高度な文明を生み出しているということの証拠画像 [<<] クールペッパーページ 22「エウロパの寒村風景」

[http://www.treeman9621.com/COOL\\_PEPPER\\_PAGE\\_22\\_COOL\\_VILLAGE\\_SCENES\\_ON\\_EUROPA.html](http://www.treeman9621.com/COOL_PEPPER_PAGE_22_COOL_VILLAGE_SCENES_ON_EUROPA.html), クールペッパーページ 24「タイタンの港湾風景」

[http://www.treeman9621.com/COOL\\_PEPPER\\_PAGE\\_24\\_A\\_HARBOR\\_SCENES\\_ON\\_TITAN.html](http://www.treeman9621.com/COOL_PEPPER_PAGE_24_A_HARBOR_SCENES_ON_TITAN.html)

CPP68「COSMIC HALF 1 発売中」の中の、「①衛星タイタンの湖畔」

[http://www.treeman9621.com/ CPP68\\_COSMIC\\_HALF\\_1\\_is\\_ON\\_SALE.html](http://www.treeman9621.com/ CPP68_COSMIC_HALF_1_is_ON_SALE.html)

CPP75 「コズミックハーフ 2 のページ画像」の中の、「②タイタン湖畔の広域図」

[http://www.treeman9621.com/ CPP75\\_Page\\_Images\\_on\\_COSMIC\\_HALF\\_2.html](http://www.treeman9621.com/ CPP75_Page_Images_on_COSMIC_HALF_2.html)

[5] 水星にも田園都市と呼べるようなものが存在するという事 [<<] CPP75 「コズミックハーフ 2 のページ画像」の中の、「①水星探査」

[http://www.treeman9621.com/ CPP75\\_Page\\_Images\\_on\\_COSMIC\\_HALF\\_2.html](http://www.treeman9621.com/ CPP75_Page_Images_on_COSMIC_HALF_2.html)

[6] 「思考のための新しいシステムの言語」の開発 [<<] 思考言語を考えようとした、初期のころのエピソード [http://www.treeman9621.com/Think\\_language\\_idea.html](http://www.treeman9621.com/Think_language_idea.html)

[7] 「思考のための新しいシステムの言語」 [<<] 思考言語のアイデア IDEA OF THINKING LANGUAGE [http://www.treeman9621.com/Think\\_language\\_CORE\\_center.html](http://www.treeman9621.com/Think_language_CORE_center.html)

[8] 「世界の文字」 [<<] 講座 言語●第 5 巻 世界の文字, 西田龍雄[編], 大修館書店[刊], 1981\_04\_01

[9] 「文字の世界史」 [<<] ルイ・ジャン・カルヴェ[著], 会津 洋/前島和也[訳], 河出書房新社[刊], 1986\_06\_15

[10] 「文字の歴史」 [<<] スティーヴン・ロジャー・フィッシャー[著], 鈴木 晶[訳], 研究社

[刊], 2005\_10\_14

[11] 「文字の起源と歴史」 [ << ] アンドルー・ロビンソン[著], 片山陽子[訳], 創元社[刊], 2006\_02\_20

[12] エドワード・デ・ボノ [ << ] Edward de Bono, From Wikipedia, the free encyclopedia  
[http://en.wikipedia.org/wiki/Edward\\_de\\_Bono](http://en.wikipedia.org/wiki/Edward_de_Bono)

[13] 「水平思考の世界」 [ << ] 水平思考の世界—電算機械時代の創造的思考法 (ブルーバック  
ス 180) (新書)

[14] 「会議のための 6 つの帽子」 [ << ] エドワード・デ・ボノ, 会議が変わる6つの帽子, 翔泳社, 2003, EDWARD DE BONO, SIX THINKING HATS, BACK BAY BOOKS, Little, Brown and Company, 1985. クールペッパーページ 11「エドワード・デ・ボノの 6 つの思考帽子」  
[http://www.treeman9621.com/COOL\\_PEPPER\\_PAGE\\_11\\_SIX\\_THINKING\\_HATS.html](http://www.treeman9621.com/COOL_PEPPER_PAGE_11_SIX_THINKING_HATS.html)

[15] ウンモ星の文字 [ << ] 宇宙人ユミットのプラズマ科学, ジャン=ピエール・プチ[著], 中島弘二[訳], 徳間書店[刊], 2007\_12\_31, p123, Fig 4-2

[16] 金星の文字 [ << ] [2]と同じ

[17] 図 3 のようなものが、何枚か残されている [ << ] [2]と同じ

[18] 地球人の一人が反重力モーターを開発した [ << ] 「南アフリカ共和国ヨハネスバークのパスル・パン・デン・バーグがこれを解読して画期的な反重力モーターを開発し、世界の UFO 研究界で大センセーションを巻き起こしたが、後に彼は何者かに拉致されて行方不明となった」  
<http://www.gasite.org/library/ucon122/index02.html>

[19] 最近現れた金星文字のテキスト [ << ] 「私はアセンションした惑星から来た / 金星人オムネク・オネクのメッセージ」, オムネク・オネク[著], 益子祐司[訳], 徳間書店[刊], 2008\_03\_31, p409

[20] オムネク・オネク [ << ] [3], [19]

[21] マヤ文字が比較的最近に解読された [ << ] 「マヤ文字解読」, マイケル・D・コウ[著], 武井摩利・徳江佐和子[訳], 創元社[刊], 2003\_12\_10

[22] 図 7 「思考言語コア」における適用例 [ << ] 創作ノート「ゾクチェンの教えとハトホルからのメッセージ」 [http://www.treeman9621.com/Think\\_language\\_HATHOLS.html](http://www.treeman9621.com/Think_language_HATHOLS.html)

[23] 「ハトホルの書」という本の第 13 章「いまだ問われざる問い」 [ << ] 「ハトホルの書 / アセンションした文明からのメッセージ」, トム・ケニオン&ヴァージニア・エッセン[著], 紫上はとる[訳], ナチュラルスピリット[刊], 2003\_03\_23

[24] 図 7 の(p292)の後にある表現 [ << ] 創作ノート「ゾクチェンの教えとハトホルからのメッセージ」 [http://www.treeman9621.com/Think\\_language\\_rDzogs\\_chen.html](http://www.treeman9621.com/Think_language_rDzogs_chen.html)  
[http://www.treeman9621.com/Think\\_language\\_HATHOLS.html](http://www.treeman9621.com/Think_language_HATHOLS.html)

[25] 図 8 「英語において思考言語コアで用いられる記号を表としてまとめたもの」 [ << ]  
THE SYMBOLS OF CORE IN ENGLISH  
[http://www.treeman9621.com/PDF\\_THE\\_SYMBOLS\\_OF\\_CORE\\_IN\\_ENGLISH.pdf](http://www.treeman9621.com/PDF_THE_SYMBOLS_OF_CORE_IN_ENGLISH.pdf)